

ture de Proust》(1963) のなかで言う〈非人称的われ〉(p. 29)につながり、逆に遡れば Sartre の《La Transcendance de l'Ego》(1936)に直結し、私としては Proust を媒介としてしらずしらず Sartre への道を開いていたもっとも重要な概念の一つである。しかしそれを理解するためには、〈与えられた〉ものとしての〈存在〉の領域——言いかえれば即自的領域——を離れてみる必要があるだろう。Proust における〈想像〉や〈虚構〉が、ここに有力な存在理由を持つことを私は今なお確信している。ところが Muller にとっては、いっさいが〈与えられた〉ものとしての〈存在〉の分析に終始するために、〈私〉の普遍性は je という単数が nous という複数(たとえば家族)に変化するところにあるのであって、非人称とは無縁だということになる(p. 66)。これではとうてい話にならない。

以上、私は本書の価値と欠陥とを大急ぎで指摘してきたわけだが、最後に今後の展望として、Muller のとりくんだ〈私〉をめぐる三つの探求のありうることふれておきたい。紙数も尽きたことだから箇条書きにしてこれを示せば、第一に、Proust の〈私〉が作品の構造を支える要として、いつどのよう形成されたのかを明らかにする必要がある。Muller のいわゆる Marcel Proust の〈唯一の作品の一つの歴史〉(p. 178)とは、本書との関連においてはここに要約される筈である。第二に、その〈私〉の形成が、言いかえれば Proust の〈唯一の〉虚構が、作者自身のどれほど根源的な選択であったのかを明らかにする必要がある。ここでは、彼の実存そのものの歴史が問われなければならない。そして第三に、以上を踏まえて、これが現代の文学と思想とにどう位置づけられ、どう受けつがれ、また、どう見失われたかを明確にする必要がある。いわゆる〈小説の小

説〉論が単なる小説の形式論や純美学的論争ではなくて、現代の表現として評価を決定されるのは、この水準においてである。私は、《失われた時を求めて》の〈私〉が、Proust の多くのものを解き明かす鍵であるという想定に立って、かつまた若干の方法的予測を持って、そのように考えるのであるが、それについてはまだ細部に立ち入ることのできないのが残念である。

Marcel Muller: *Les Voix Narratives dans la Recherche du Temps Perdu*, Droz, 1965

Hans Tümmeler : *Goethe in Staat und Politik*

植田敏郎

1779年の1月の終りにゲーテは日記に次のように書いている。

“……グローゼンルートシュテット〔グロースルーデシュテットのこと〕の役所はプロイセンによって不安にさせられた。ラインハーベン〔プロイセンの募兵士官〕の再来。厄介な提案。二つの禍の間で防御力のない状態。われわれはもう2、3手チェスの駒を動かすだけでよい。そしたら王手詰だ。王への急使を待つ間の猶予。”

とある。それから2月1日の秘密会議での大公をふくめてのワイマルの国家指導の代表者たちのひどい立腹がゲーテの日記にうかがわれる。どうしてこんな事態が起こったのであろう。

1778年から79年にかけての冬にプロイセンの戦備が盛んに行なわれていた。バイエ

ルンの王位継承戦争でプロイセンとオーストリアが緩慢に行なっていた戦争が春になって熾烈の度を加えるはずであった。フリードリヒ王の委託を受けてプロイセンの司令官がワイマルのカルル・アウグスト (Carl August) に対してプロイセンに勤務する新兵を募集するか、その募兵をプロイセンにまかせてくれといったのである。

当時のザクセン・ワイマルとザクセン・アイゼナハに分かれてカルル・アウグストの支配下にあった公国は 36 平方マイル (ドイツマイルは 7500 m)、人口は 10 万少々で、本当の小国にすぎなかった。しかもカルル・アウグストの母アンナ・アマーリエはフリードリヒ大王の姪であったので、カルル・アウグストとフリードリヒはいとこ同士であった。

話を前にもどすと、2月7日に新兵の徴募をこたわったワイマルにプロイセン王のそれを聞き入れないという手紙がとどいた。無力な小国がほとんど絶望的な形勢にあることがはっきりした。しかしこの手紙について述べたものはいろいろあるが、手紙そのものはあとで述べるように最近まで発見されていなかった。

プロイセン側がワイマル公国の国境近くの村へ入って来て、脱走兵がいるからといって若者を連れ去るという事件が起こったが、それはほんとうの脱走兵ではなくて、畑で働いている丈夫そうな若者であることが多かった。ワイマル公国では脱走兵を入れないようにすることと、国境に警備の兵を配置するよりしかたがなかったが、その警備兵もいよいよの時にはそれほど役に立たなかったといわれている。

フリードリヒ王の拒否の手紙を受け取ってからの息づまるような空気の中にカルル・アウグストが議長になって枢密顧問官も出席した秘密会議が開かれた。この時にいわゆるゲーテの政治的鑑定が行なわれた。ゲーテはプ

ロイセンの要求を入れた場合と入れない場合に生ずると考えられるあらゆる事態について述べ、ザクセン・ワイマルが“好意ある同じ身分のもの”ともっと密接な連結をして共同の処置によってそういう無理な要求に対抗できるといい、これが後の君主同盟のもとをなすという説が行なわれている。これに関するゲーテの日記や手紙、カルルの手紙などをよりどころにして、このことが何人かの人によって論ぜられている。

ゲーテの最後の勤務上の協力者のカルル・フォーゲル (Carl Vogel) が 1863 年にカルル・アウグストとゲーテの文通を公にした。そして政治家ゲーテが問題になるきっかけを作った。

次にオットカール・ローレンツ (Ottokar Lorenz) が 1893 年に“ゲーテの政治的修業時代” (Goethes politische Lehrjahre) の“政治家的行動”の章でこの問題を論じて、ゲーテの勧告にこそ“君主同盟の本来の根源の見解”があることを述べた。そして“1778 年にゲーテが君主同盟設立の原動力を与えた”ということが将来わかるだろうという希望を述べている。

ゲーテの書いたものの政治的意味の過当評価はその翌年パウル・バユール (Paul Bailieu) によって文献の利用がいかげんだと非難され、ローレンツの論文は“浅薄で軽薄な建築物で、いい動機と機知にとんだ着想がなくはないが、ちっとも基礎がない”とやっつけた。つまりゲーテの鑑定の意味はそんなに大きいものではない、ゲーテがいなくてもあの考えは当時あったとした。

1年後ハインリヒ・デュントツァー (Heinrich Duntzer) が“ゲーテ、カルル・アウグストとオットカール・ローレンツ”という題の本で、皮肉たっぷりに述べている。ローレンツがゲーテの文書から推論した結論はきびしくまた嘲笑的に拒否された。しかしデュン

ツァーにもゲーテのした仕事について正確なことは明らかでなかった。

ワイマル版のゲーテ全集とハンス・ワール(Hans Wahl)によってとゲーテとカルル・アウグストとの文通が二通り出て、両方とも序言でゲーテがカルル・アウグストに勧告したのは1779年の終りとした。ワールはゲーテの述べているところのはじめに関係のあるフリードリヒ大王の返事がないし、鑑定の利用と結果についての書類がないので解決できないとした。

ローレンツ、バユ、デュンツァーが論じて60年以上たって問題の大部分が解決できるようになった。カルル・アウグストの手紙やゲーテの書いたものなどに一つの連絡がつくようになった。ことにこれまで用いられなかった国立中央文書館の“1778年と1779年のプロイセンの徴募事件に関する機密官庁記録”(Geheime Canzley-Acta, die Königl. Preußische Werb-Angelegenheit de annis 1778 et 1779 betr.)が歴史家テュムラーによって発見されたからである。この書類の束の中にハンス・ワールがないのを残念がったプロイセン王の返事も含まれ、ゲーテの鑑定のかかなり正確な日付がわかるようになった。その成立事情と結果が完全とはいえないまでもこれまでよりずっと明らかになった。

1月25日付のカルル・アウグストの手紙に対する返事はフランス語で書かれテュムラーの著書の63～64ページに全文がのっている。また1779年2月9日の秘密会議のゲーテ自身の筆になる記録は同書の66ページから71ページにのっている。そのうちいわゆるゲーテの鑑定は68ページ以後である。これでこれまで推測だけで論ぜられていたことが今度は記録を基礎に論ぜられるようになった。記録によるとフォン・フリッシュが上位の顧問官として主な報告を行ない、プロイセンの要求を拒否した場合と、容れた場合に

起こる結果が論ぜられた。はじめの場合は強制募兵と強制舎営その他の処置を予期せねばならず、第二の場合は国の若者がへることはさておき、オーストリアの報復処置を覚悟せねばならなかった。ペータースベルクの城塞のそばに皇帝の衛戍地があったからである。

シュナウス顧問官からプロイセンの兵役のためにさきうる適当な人数が述べられ、つまり中立を放棄した場合の最後の結果について発言されたあとで、発言はゲーテの番になった。ゲーテの鑑定はこの記録によると全く不偏不党であった。大公によってはやく決定することの重要性を説き、二つの決意の可能性に言及して、一方または他方に決定した場合に考えうるあらゆる結果に対して備えなければならぬことを強調した。

話が進行しているうちに次のような発言があった。ただ残念ながら誰の口からいわれたかわかっていない。その箇所は次の通りである。

“最善でもっとも確実な打開策は今の戦争の間他の中立の、新教ならびに旧教の宮廷と適当な結合を、いわば *parti mitoyen* を形成することであろう。それは戦争を行なっている強国のあつかましさと圧制をそれに対して共同してとる方策によって防ぐことである。”

それに相応する書類を起草するという決定はしたが、主要問題についての決定はしないで顧問官は解散した。

この会議の直接の印象のもとに、ゲーテが、その夜のうちかそれとも翌朝早く、おそらくゲーテがまとめたいちばん長い政治的内容の文書であるこの事態についての包括的覚え書を作製した。

ゲーテは枢密顧問官ではなかったが、数週間来軍事委員会の長官をしていたので、この事件にいちばん関係があったため、熱心に新

しい任務ととっくんだわけである。ゲーテはまた大公カルル・アウグストと親友関係にもあったので、大公がこれまで外交問題でデリケートな問題になるといつもゲーテの援助を求めていたから、今度のような自分が位についてから生じたうちでいちばん困難な問題でも友人ゲーテに個人的な鑑定を求めたと考えられる。テュムラーがこの文献の保存の仕方がそれを指示しているといっているのは正しいであろう。

ゲーテの鑑定も内容的にはあの会議で言われた考えや提議以上のものではあるまい。しかしゲーテは二つの決定に際して考えられるあらゆる場合をもう一度自分の頭で考えてまとめたのであろう。大国の越権に対して中小のドイツの君主の同盟を作って対抗するところがいちばん重要な意味をもっているが、これがゲーテの発案であることを示すきめ手はない。

しかしゲーテの政治的見解の原則はこの文献が出る前もほぼ同じであった。つまり強国に対して用心ぶかく控え目にするのと、その日その日の困難を巧みに切りぬけることと、明らかに懐疑をまじえているが、弱いものの防衛的連合であった。

1964年に発表された歴史家ハンス・テュムラーの“国家と政治におけるゲーテ”(279ページ)はゲーテと政治界との関係を総合的に脈絡をつけて述べてはいないが、その特徴的な例において研究している。本書は次の八つの論文をおさめている。

- I. ゲーテの政治的活動 1778～1790。
- II. 1779年のゲーテの政治的鑑定。
- III. ゲーテとイルメナウの亡命者ドゥ・ワンドルの悲劇(1795)。
- IV. 古典ワイマルの平和。1795年より96年にかけての高度古典主義のはじめにおけるワイマルの平和への努力の道と

成功。パーゼルの和平の続き。

- V. フィヒテの1799年におけるイエーナの教職からの罷免へのゲーテの関与。
- VI. イエーナの危機の年(1803年)におけるゲーテ。大学の歴史への一寄与。
- VII. 祝詞と関心。1806年から1819年までのゲーテとフォークトとの文通の最後の時期からの友情の証拠。
- VIII. ゲーテ、フォークトとワイマルの1815年から1819年までの出版の自由。

IとIIの論文が外交官、政治家としてのゲーテのことを述べたもので本の3分の1のページを占めている。ゲーテがカルル・アウグストのお伴をしてベルリンの宮廷へいき、政治的活動よりもむしろ政治の関することを観察して大公に報告したこと、政治活動に耐えられなくなってイタリアへ逃れたこと、イタリアからも大公に手紙で政治について勧告したこと、イタリアより帰ってからも、対フランス戦のためプロイセン軍にいる大公をたずねたり、マインツ攻囲に加わったりして、当時の政治問題に直接たずさわったことなどについて述べられている。しかしいちばん中心になるのは本稿のはじめに述べてある問題である。もとの資料によって研究することのほとんどできないわれわれにとっては、新資料の発見によって、これまで資料と資料の間に欠けていたものが見つけられることはひじょうに役に立つ。

この政治への関与がゲーテの体験をどれだけ豊かにしたか、それが後の思想なり作品なりにどう反映したかを研究するのは歴史家の問題よりはわれわれの問題である。

IIIはイルメナウでフランス人の技師がワイマル大公国のために製鉄工場を作ったが失敗して自殺したことをとり扱ったもので、それにゲーテが関与したとはいえ、それほど重要な問題はふくまれていない。むしろ自然科

学者ゲーテとの連関で考察されるべき問題であろう。

IV は 1795 年から 96 年にかけてのカルル・アウグストの和平のための努力について述べてある。フランス軍がマンハイムをおそったとき、カルル・アウグストはゲーテを偵察者としてフランクフルトへつかかわそうとしたが、ゲーテがことわったことについて書かれている。

V はイエーナ大学の教職から哲学者フィヒテを免職するにいたったいきさつを、主としてフォークトとの文通によって述べてある。はじめは好意的だったゲーテもフォークトもフィヒテが脅迫的な手紙を書いたことが原因で免職に賛成した次第が論ぜられている。

VI はイエーナの大学の歴史で、教授の間の対立にゲーテも手を焼いたことが述べられている。

VII ゲーテとフォークトの友情について手紙をもととして述べてある。

VIII はワイマルの出版の自由の問題で、これは本当の政治の問題とはややはなれている。

これらの論文がどういう特徴をもっているかは著者テュムラーのこれまでの業績によって自ら明らかになるであろう。

テュムラーはバイエルンの学士院の歴史委員の公にした 19, 20 世紀のドイツの史料としてウイリー・アンドレーアス (Willy Andreas) の編集した“ワイマルの公爵兼大公カルル・アウグストの政治的文通” (Politischer Briefwechsel des Herzogs und Großherzogs Carl August von Weimar, 1954 ff) の編集にたずさわって、これまで発表されなかったカルル・アウグストの手紙に接する機会に恵まれた。またゲーテとその同僚であり友人であったクリスチアン・ゴットローブ・フォークト (Christian Gottlob Voigt) との文通を出している。またワイマル国立中央図書館のゲーテの職務上の文書の出版にも一時協力し、最近はいエーナ大学の歴史の研究にもたずさわっている。

こうしてここにおさめられたテュムラーの論文はいずれも以上の仕事にたずさわる間に発見した新しい史料によって、ゲーテの政治家、外交官としての行動についての新しい研究である。

テュムラーのとりあつかった問題は相当多岐にわたるので、ここにはゲーテと君主同盟の関係の問題にしぼって述べた。テュムラーのいちばん重視している問題もこれであるからである。

Hans Tümmeler: *Goethe in Staat und Politik*, Böhlau Verlag Köln Graz, 1964